

ニュー・ワールド

2006(平成18)年4月23日鑑賞(梅田ピカデリー)



監督・脚本＝テレンス・マリック／出演＝コリン・ファレル／クオリアンカ・キルチャー／クリストファー・プラマー／クリスチャン・ベール／オーガスト・シェレンバーグ／ウェス・ステューディ／デヴィッド・シューリス (松竹配給／2005年アメリカ映画／136分)

……ドヴォルザークの交響曲『新世界より』とは、言うまでもなくアメリカ新大陸のこと。時代は今から400年前の1607年。アメリカの少年少女なら誰もが知っているのが、ポカホンタス伝説。これを素材として、ネイティブ・アメリカンのヒロインであるポカホンタスとバージニアの総督ジョン・スミスとの間の純愛と、その後2人がたどった数奇な運命を描いたのがこの映画。ポカホンタスはイギリスに渡り、国王陛下との謁見まで許されたが、そんな彼女の夫となった男性は……？ テレンス・マリックという大監督がアメリカの原点を見つめ直すべく自ら脚本を書き、渾身の思いをこめた作品だが、さて、その出来は……？ そしてその評判は……？

「新世界」とは？

アントニン・ドヴォルザークが交響曲第9番短調『新世界より』を発表したのは1893年だが、その新世界とは言うまでもなくアメリカ大陸（北米大陸）のこと。大航海時代の先陣を切ったのは、ポルトガルとスペイン。ポルトガルは1530年頃までに南米のブラジルを、スペインは1540年頃までに中南米の大半を勢力下に収めていた。ポルトガル、スペインの狙いは、その後「黄金の国」ジパングが求められたのと同じ、黄金探し。インカ帝国滅亡の物語を読むと、南米大陸におけるスペインの横暴ぶり、略奪ぶりのすさまじさが印象的だが、それはその後北米大陸に「進出」したイギリスやフランスも基本的に同じ。

イギリスがはじめて北米大陸のバージニアに渡ったのは1607年だが、そこには

先住民たるインディアンたちが推定300万人生活していたとのこと。その結末がどうなったのかは、各種の西部劇を観れば明らかだが、この映画はまさに1607年、新世界に到着し、最初のイギリス人たちの入植地「ジェームズタウン」建設に入るところからスタートだ。

「ポカホンタス伝説」とは？

ネット情報によれば、「ポカホンタス伝説」とは、アメリカの少年少女なら誰でも知っている物語らしい。そして、日本では私は全く知らなかったがディズニー映画で知られているとのこと。

今から400年前、1607年にイギリスがはじめて北米大陸のバージニアに渡った時に生まれたジョン・スミス（コリン・ファレル）と、アメリカ・インディアン少女ポカホンタス（クオリアンカ・キルヒャー）との純愛物語（？）は、入植地の総督となったジョン・スミスが自ら書いた『ヴァージニア、ニューイングランド、サマー諸島の歴史』（1624年）の中に記されているらしい。アメリカ人たちがこんな伝説をどこまでホントに知っているのか、日本人の私には全くわからないところだが、興味ある物語であることはたしか。

テレンス・マリック監督とは？

この映画を監督・脚本したテレンス・マリックは、大監督ながら製作映画が少ないことで有名な人物……？ もっとも、はるか昔の『地獄の逃避行』（73年）、『天国の日々』（78年）を私は両方とも全く知らない。また、20年間の沈黙を破って1998年に発表した『シン・レッド・ライン』は、ベルリン国際映画祭金熊賞を受賞したが、私はそれほどすばらしい映画とは思えず、むしろ『プライベート・ライアン』（98年）の方に感銘を受けた。

『シン・レッド・ライン』の印象とパンフレットを読んで浮かび上がったテレンス・マリック監督の人物像は、映画界の習慣におもねず、あくまで「オレ流」を貫くタイプらしいということ。それは、『キネマ旬報』5月上旬号の特集で取りあげている『ニュー・ワールド』の中の、「テレンス・マリック映画歴」を読んでも明らかかなところだ。

テレンス・マリック監督の視点は……？

そんなテレンス・マリック監督が自ら脚本を書き、伝説の女性ポカホンタスを演ずるネイティブ・アメリカンを必死の思いで発掘して監督したのがこの映画。

したがって、この映画に対するテレンス・マリック監督の思い入れは相当なもの……？

まずは①ジェームズタウン建設に至るまでのジョン・スミスとポカホンタスとの純愛。続いて②ジョン・スミスの死亡を知らされた後、ポカホンタスの前に新たに現れた男性ジョン・ロルフ（クリスチャン・ベール）とポカホンタスとの結婚。そして③夫婦としてジェームズタウンからイギリスへ移った2人がその後迎えた数奇な運命。そして④ポカホンタスとジョン・スミスとの再会。そんな流れの中、ポカホンタスとジョン・ロルフそしてジョン・スミスは、それぞれどんな人生を歩んだのだろうか……？

こんな壮大なテーマに、テレンス・マリックという大監督がアメリカの原点に戻るべく関心を示したのは当然。果たして彼は、いかなる視点から脚本を書き、3人の人生をどんな風に映画の中で描いたのだろうか……？

ニューポート船長の決断とイギリス人たちの団結力は？

映画の冒頭、ジョン・スミスはなぜか反乱罪で裁かれるべき立場で、船底に閉じ込められている状態。新大陸への船団の指揮権をとるのはニューポート船長（クリストファー・プラマー）。到着したバージニアでイギリスの入植地ジェームズタウンを築いていくためには、ジョン・スミスのセンスと行動力が不可欠だと考えたニューポート船長は、彼に対して川上に上って行き、先住民と交渉をする役を命じ、自らは補給物資調達のため本国へ戻って行った。このニューポート船長の決断は一面では大正解だったが、やはり求心力のあるボスがいなくなると、現場は混乱するもの……。

ジョン・スミスが、先住民の族長ポウハタン（オーガスト・シェレンバーク）と接触しようとしたのは、まさに命がけの任務。幸いにも、その娘ポカホンタスの命乞いのおかげで命拾いしたうえ、先住民との間で心の交流を深め、さらには

ポカホンタスとの間に純愛が芽生えてきたジョン・スミスだったが、ポウハタンの承諾がなければ、勝手にジェームズタウンに戻ることができないのは当然のこと。やっと「春になればイギリスに帰れ」という条件付きで解放されたため、食料を持ってジェームズタウンの砦に戻ったジョン・スミスだったが、これを迎えた砦の人たちの反応は冷たいものだった。

厳しい状況下に置かれれば、人間関係が難しくなるのは当然で、ヘンなリーダーが指揮権を持つとロクなことがないもの。さてこんな中、ジョン・スミスはどんな対応を示し、どう生き残っていったのだろうか……？ また、イギリス人たちの団結力の程度は……？

ジョン・スミスとポカホンタスの純愛模様は……？

ジョン・スミスとポカホンタスとの純愛がなぜ順調に続かなかったのか？ それには、冬を迎え、食料が底をついたジェームズタウンの状況や、再びジェームズタウンに戻ってきたニューポート船長によってもたらされた、イギリス国王がジョン・スミスに新たな任務を遂行させるためその帰国を待っているとの情報などがある。しかし、映画を観ている限り、そのような客観的な状況よりも、ジョン・スミス自身の気持ちの持ちようの方がウエイトが大きそう……。そこらの描き方がこの映画の大きなポイントだから、くれぐれもお見逃しのないように……。

もっとも、イギリスへ戻ることを決意したジョン・スミスが、「ポカホンタスには、俺は溺死したと伝えておいてくれ」と部下に言い残して、1人去っていくのはちょっとおかしいのでは……？ 誰もがそう思うはず……。一体、彼は何をどう考えていたのだろうか？ どうもその点、私は納得できないのだが……？

ジョン・ロルフとは？

他方、これによって悲しみに打ちひしがれ、生ける屍状態となったポカホンタスに対して、愛情を示したのが、ジェームズタウンでタバコ園経営をしている貴族のジョン・ロルフ。妻と娘を亡くした悲しい体験を持つ彼はあくまでやさしくポカホンタスに接したため、遂にポカホンタスからの信頼と愛(?)を獲得し、めでたく2人はゴールイン。ポカホンタスはキリスト教に改宗し、「レベッカ」

という洗礼名を受けたうえ、2人の間には男の子まで授かることに。さらにイギリス国王から本国へ呼び戻されたジョン・ロルフは、夫婦でイギリスに戻り、ポカホンタスは国王と謁見するという榮譽まで。ここまでは実話らしい……。

このままいけば何の問題もなかった2人だが、ここでポカホンタスの耳に入ったのが、「ジョン・スミスは生きている」という情報。さて、ここでポカホンタスがとった行動は？ そして、そんな妻の行動に対して、ジョン・ロルフが示した対応は……？

ちょっと鼻につくナレーションの多用ぶり……

『シン・レッド・ライン』でも少し鼻についていたが、この映画でも多用されているのがナレーション。とりわけ、前半部分の孤独な状態にあるジョン・スミスの心理描写と、ジョン・スミスが死亡(?)した後、ジョン・ロルフからのアプローチに悩むポカホンタスの生き方や心理描写にそれが多用される。もちろんそれは、スクリーン上の俳優たちの動きと完全に一致させているので不自然さはないのだが、あまりそれが多くなると、ストーリーはよくわかるものの、現場感・臨場感が乏しくなってくるし、俳優たちの演技の腕の見せどころも少し薄れてくる感じ……。コリン・ファレルの実力は既に十分わかっているからそれでもいいが、せっかく探り当てた宝石のようなネイティブ・アメリカンの女優の実力を如何なく発揮させるためには、ナレーションとして彼女に語らせるのではなく、もっとナマのセリフとして表現させた方が良かったのでは……？

チャン・イーモウ 新人女優探しは張 藝 謀監督が1番……？

中国の張 藝 謀監督は新人女優発掘の名人として有名……？ 「しあわせ3部作」に登場した

- ①『あの子を探して』(99年)で、健気な代行教師役を演じた魏敏芝、ウェイ・ミンジ
- ②『初恋のきた道』(00年)で、教師を迎えるために赤い服を着て走る姿が印象的だった章子怡、チャン・ツイイー
- ③『至福のとき』(02年)で、盲目のヒロインを演じた董潔ドン・ジエ

の3人は、それぞれ彼がオーディションで発掘した女優たち。

さらに近時は、④『単騎、千里を走る。』（05年）で、父親を探す中国雲南省の麗江の奥深くに住む少年ヤンヤンを演じたヤン・ジェンポーまでも発掘した。

^{ウェイ・ミンジ}魏敏芝は女優としては一発屋として終わったが、2005年5月31日付朝日新聞によれば、教師役であった13歳の少女は今は19歳の大学生となり、映画監督を目指しているとのこと。他方、^{チャンツイイー}章子怡はその後急成長し、先輩の^{ゴンハリー}鞏俐などを追いついて、今や世界で最も有名な中国人女優となっている……。また、^{ドン・ジエ}董潔は、その後『最後の恋、初めての恋』（03年）に出演するなど、その成長ぶりはすごいもの……。

「一発屋」の危険性も……？

この映画を製作するについて最も難しかったのは、ポカホンタス役にピッタリの女優を探し出すこと。

ハリウッドには美人女優はたくさんいるが、アメリカ・インディアン＝ネイティブ・アメリカンとしての存在感をスクリーン上で見せつけてくれる若手女優はまずいないはず。そんなポカホンタス役探しの苦労話がパンフレットの中で紹介されているが、やっとテレンス・マリック監督が発掘したのが、インディオのケチャ／ウアチャパエリ族、アラスカ、スイスの血を引くという16歳の少女、クオリアンカ・キルヒヤー。

これによって初主演を果たしたこのクオリアンカ・キルヒヤーは、ポカホンタス役をオーラを放ちながら見事に演じている。しかし、ハリウッドでは「使い捨て」も常だから、ヘタすると彼女も「一発屋」となってしまう危険性も大いに……？

音楽はもうひとつ……

映画の冒頭からしばらくの間続くのは、美しいバージニアの入り江に到着した帆船から、小舟に乗り換えて新大陸に降り立ち、新たな冒険の旅に出発しようとするイギリス人たちの物語。

そして、そのバックに静かに流れる音楽は、これから開かれていく新世界を予言するかのような雰囲気がいっぱい。その音楽の静けさと美しさは、その後のス

トリー展開の中でも全く変わらず、常時スクリーン上に登場する人物たちを応援するような役割を果たしている。

そして、パンフレットによれば、「魂を清めるような優美で崇高な音楽は、『タイタニック』でアカデミー賞を受賞したジェームズ・ホナーが手がけた」とのこと。たしかにこれはおおむね当たっている。しかし残念ながら、この映画のラストの音楽はいただけない。

物語が終わった途端、突然静寂状態になって字幕が流れはじめるが、その後の流れてくる音楽はあまりにも静かすぎるもの。これでは「優美で崇高」とは言えず、弱々しすぎるのでは……？

そして、何となく中途半端な状態でジ・エンド。ひょっとしてこれは何かの計算違いでは……？

大きなお世話ながら、収支のバランスは？

『キネマ旬報』5月上旬号の「テレンス・マリック映画歴」の特集の中に、「苦戦？ 健闘？ 『ニュー・ワールド』評価と成績イン・アメリカ」と題する面白いコラムがある。それによると私を感じたのと同じように、この作品の評価は大きく分かれているらしい。

辛口批評は「美しいけれど躍動感がない。冒頭以降は、話が盛り上がらない。全体的に薄っぺらい」「スローで退屈」というもの。そういう印象は私も同じで、容易に否定できないだろう。

さらに大きなお世話ながら、心配なのがサイフの事情。「万人向けではなかったためか、最大811館でしか公開されず」「3月末時点で総収入は1200万ドル台。製作費は3000万ドルというから、興行面では期待はずれだったと言えるだろう」とのこと。

これはちょっとヤバイ。製作費15億円の『男たちの大和／YAMATO』（05年）が予想以上に健闘し、50億円の興行収入をあげたことと対比すれば、やはり『ニュー・ワールド』もあまり小難しい映画とせず、万人向けとなるように製作した方が良かったのかも……？

2006(平成18)年4月24日記